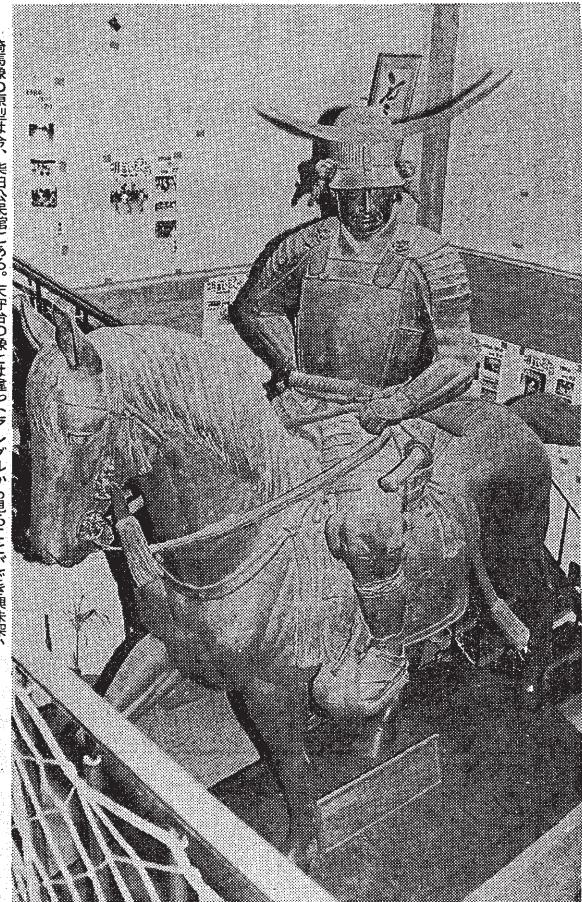


政宗騎馬像余話

小室達・日記から



伊達政宗像馬鹿像の制作者、小笠源は、感情の高まる手で、まことにほんとうに書道が通るたむだに、その日の日記をひつゝて、伊達政宗（東京・日暮里）へ。伊達が思われるため安眠、地獄かと思われるため、午前七時起床し、午前中今田の歴史的な鑄造へで向う。設置位置は地面に半埋設する型式だ。すべての

達・日記から

八十四号 古
鏡五貫(十九
合計三百
六十貫(九
七十五貫。春

呼ばれながら造り上げた原の金

原型
鑄造

慰靈に古鏡19キロ

雄心勃勃(ほづっぽく)思
いを遠く南歐に馳する英傑
が治内の平和的施設を胸深
く藏しながら達(はる)か
太平洋を睥睨(へいげい)
し、悠揚迫らず馬上夢かに
英姿颯爽(さうそう)と青
葉城に入城せられたのであ
る。

公御年三十七歳、十五年間の思い出の出で、岩出山居城より、かねて築城中の青葉ヶ崎に移り住むこととなり、当時の地名、千代を仙台と改め入府せられ、じ來、年を逐（お）うて大仙台の基を拓かれたのである。

騎馬像の原型は今、柴田公民館にある。天守台の像とは違ったアンダルから見ることができ興味深い。

れ、藩祖公銅像を挙した際、ちょうどい合わせた觀光光スのガイドが間違った説明をしていた。『像是政宗公三十六歳、親の仇（かたき）を打った當時を模したものだ』というのである。腹を立てた小室は河北新報のコ

馬の静中動をはらむ氣韻を
さに強調するべきである
た。
△